



アトリエ 訪 問

第 20 回

山口つばさ

漫画家

美大受験や東京藝術大学を舞台とした
青春群像漫画『ブルーピリオド』。

ページを捲れば、躍動感のある絵に圧倒され、
個性的なキャラクターが悩みもかく姿に共感させられる。
そんな人気漫画を手がける山口つばさの創作現場をのぞいた。

撮影 永野雅子





部屋を取り囲むように置かれた本棚には、美術関係の書籍や愛読する漫画がずらり。カエル好きなので、棚にはかわいらしいカエルの人形も。

「自分のこだわりを誰かに承認されるって、すごい体験だと思っています。」

にぎわう商店街を抜け、少し歩いた先に仕事場はあった。自宅も兼ねるマンション一室のドアを引くと、気さくな笑顔で山口さんが迎えてくれた。南向きの窓から日光が差し込む作業部屋に入ると、目に飛び込んできたのは「ブルー」の壁だった。

—— 青い壁がすてきですね。

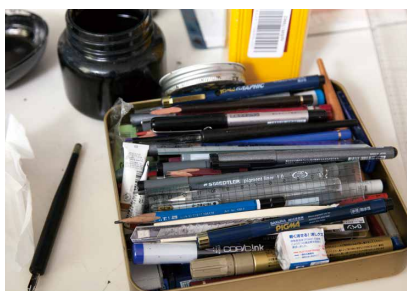
山口 実家のカーテンが青だったこともあって、目の前が青だと落ち着くんです。自分で青く塗ったので、あまりきれいじゃないですけど(笑)。

右利きなので、机や椅子は左側から光が差し込むように配置してあります。今はアシスタントさんにはリモートで仕事をしてもらっているのですが、基本的に一人で作業しています。ネームの作業とかで行き詰まったときは、スマホを家に置いてカフェにこもったりもします。

—— 画材はどういったものを使われるのですか。

山口 よく使うのは墨汁ですね。インクよりもさらっとしていて、すぐ乾くのでやりやすいんです。色塗りは水彩が多いですが、載せる媒体によっていろいろ変えています。ネームからペン入れまでは手書きでやって、トーンを貼ったり、作中絵を入れたりといった作業はデジタルでやる感じです。

—— 作中では、本物の美大生が予備



作画やネームに使うさまざまなペンや鉛筆。「人物のペン入れをしているときが楽しいです」。

校時代に描いた絵なども登場しますよね。

山口 たくさんの方に作品を提供していただいたり、取材させていただいたりしているおかげで、『ブルーピリオド』を描けています。

ストーリーを考えるときは、自分の体験をもとにしたり、友達の話をも参考にしたりすることが多いです。絵画教室の話を描いたときは、そこで先生をしている友達に取材をしました。第1巻で主人公の八虎が美術にハマっていく過程も、実は友達から聞いた話を参考にしています。

—— そうなんですか！

山口 連載を始める前に、中学校で美術の先生をしている友達から聞いた話なんですが、クラスで美術の授業に真面目に取り組まない生徒がいたそうなんです。

ある日、オリジナルの標識やマークをつくるっていう授業で、その生徒が「恋愛推奨」みたいなメッセージをテーマに、男女が手をつないでいる構図のマークをつくろうとしたんです。その子は恋愛ドラマが大好きだったそうで、「あまりギュッとじゃなくて、優しく握っているふうにしたい」とか「女の子のスカートは短すぎないほうがいい」とか、かなり試行錯誤しながら真面目に取り組んだらしくって。

—— こだわりが出てきたんですね。

山口 そうなんです。完成した後に



着色に使う絵の具。水彩やアクリルなど、媒体によって使い分ける。

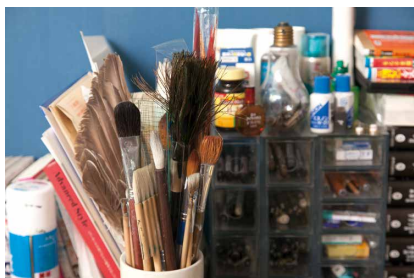


上／ペン入れに使用するインク。ペン先についたインクをティッシュでこまめに拭き取りながら作画していく。下／トーン処理や作中絵の貼り付けなどを行うデジタル端末。作品の納品はデジタルデータで行っている。

クラスで人気投票をしたら、その生徒の作品がすごく人気だったみたいで。それから、その生徒は美術の授業に真剣に取り組むようになったという。とてもいいエピソードだなと思って、『ブルーピリオド』を描く際の参考にしました。

自分のこだわりを誰かに承認されるって、すごい体験だと思っています。八虎も、渋谷を青く描いた風景画をきっかけに美術にハマっていきませんが、彼も絵に込めたこだわりや思いが周囲に伝わったことがうれしかったわけで。

八虎のように、もともとまったく美術に興味がなく、その道の天才ではない人間が美術の道を歩んでいく過程を描くことで、少しでも美術への距離感を縮められたらいいなと思



さまざまな筆。よく使うのは、書道などに使う「開明墨汁」だ。



『ブルーピリオド』の作中に出てくるモチーフが描かれたトートバッグ。

っています。—— 山口さんご自身は、子どもの頃の美術の授業で印象に残っていることはありますか。

山口 私は小さい頃からずっと絵を描いているような子どもだったので、周囲からも「絵が得意なつばさちゃん」みたいな感じだったんですね。それで中学生の頃、少しグロテス

クな絵を描いたことがあったんです。友達も絵を見て騒いでくれるし、描いていて楽しいし。そしたら、その絵が職員室で少し問題になってしまった。でも、美術の先生が「この年頃ならよくある」とフォローしてくれたらしいんです。尖った絵でも、ありのままを見てくれた気がしてうれしかったですね。



やまぐち・つばさ

東京都出身。東京藝術大学絵画科油画専攻卒業後、『熱の夢』で「アフタヌーン四季賞 秋のコンテスト」の佳作を受賞。2016年に新海誠監督原作の『彼女と彼女の猫』のコミカライズで漫画家デビュー。現在、「月刊アフタヌーン」(講談社)で『ブルーピリオド』を連載中。同作は「マンガ大賞2020」で大賞を受賞、21年10月よりテレビアニメ放送もスタート。(作品にノイズを入れたくないとの理由から、素顔は非公表)

高等学校の新版教科書『美術2』には、『ブルーピリオド』の制作の流れや、漫画を描くときに使う道具などが紹介されています。